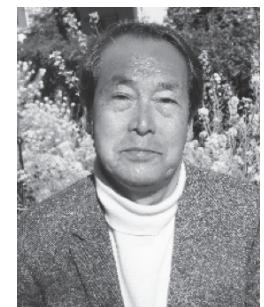


# 人生百年、古希より学ぶ

原 敏裕 (高19回)



●はら・としひろ  
豊丘村出身。一橋大学商学部卒。  
三菱商事(株)に入社して本社勤務の他に、メキシコ、米国、韓国での駐在を経験。三菱商事(株)を退社後は、東京情報大学勤務。趣味は、テニス、ゴルフ、旅行、音楽鑑賞、読書。

一昨年1月に古希を迎えた勤務していた大学の仕事も一念の目途がついたので、3月を以って退職し第二の仕事人生に終止符を打った。

第一の仕事は、商社入社から定年までの36年間、その後の第二の仕事は大学における9年間と合計45年間だった。大学での仕事は、大学の先生方と連携しつつ、学生達の進路・就職指導にあたっていた関係上、自分自身でも大学で学ぶ意味や意義について考えさせられる機会が多くあった。そうした学生達からの相談を受けて指導する立場から一転して、学生の側に身を置いて自分がまだ知らないことや関心あることを教えてもらい学ぶ第三的人生も、新鮮かつ楽しいかも知れないと思つた。

早速、早稲田大学の公開講座を申し込んだ。一昨年4

月から昨年の2月までの間、11の講座を受講。講義回数85回。履修単位数は15だった。唯一、残念だったのは、昨年1月後半頃から騒がれ始めた新型コロナウイルス感染の影響で、昨年3月に予定されていた講義がいつせいに中止となり受講できなかつたことだ。

だがその後、コロナ感染の状況を勘案しつつオンラインの講義に切り替わり、7月から徐々に再開されて再度受講することとなつた。自宅で居こもりしながらオンライン受講する新しい形態は、当初少し戸惑いがあつたものの時間の経過とともに慣れて常態化した。まさに新常态(ニューノーマル)だった。

振り返れば、私の大学生時代は100人程度に入る大きな教室での講義がごく普通だった。そうした授業風景がコロナ感染拡大の影響で急速に変化した。三密(密閉、密集、密接)を避けるべしとの感染防止対策から、学校

## 初めてのオンライン学習

という場所に集まらず勉強する方法として、IT(情報技術)を活用した教育が始まった。今やITの驚異的な進化に伴つて、同時双方向のみならず関係者全員が同時に参加できるオンライン教育化が実現普及している。

### 課題解決型学習のオンライン授業に参画

昨年10月、私が大学勤務時代に懇意にしていた情報システム学系の准教授から思いがけない依頼が来た。大学で実施する課題解決型学習のオンライン授業への企画参加の要請だった。

この学習は、学生が与えられた課題(テーマ)について、自分独自のインタビューや調査を行い試行錯誤しながら自ら問題点を見つけて解決する方策を探るもので、考える能力をつけることに主眼が置かれていた。

私なりに学生の思いや考え方をこの機会に聴かせてもらいたいとの願望もあり、快諾。オンライン授業は昨年の12月と今年の1月との2か月にわたつて行われた。

私が出した課題は、「コロナ禍における不安・不自由を解決する提案」を考えることだった。

- ① どのような変化が具体的に生じたか
- ② それに伴う具体的な不便・不自由は何か
- ③ それを解消する具体的な工夫や方策は何か

時間の過ごし方がわからない／この状況がいつまで続くのかとの不安感が付きまとぐの判断から、学生にとって身近な共通関心事に絞り込

大学や病院に行けない／自由に買い物ができない／映画館や博物館に行けない／イベントに行けない／旅行に出かけられない／外食ができない／飲み会やクラス会ができるない

② 大学関連  
対面授業が受けられない／バイトができない／サークル活動ができない／友人と交流の機会が持てない／就職活動ができない

③ 自宅に於いて

時間の過ごし方がわからない／この状況がいつまで続くのかとの不安感が付きまとぐの判断から、学生にとって身近な共通関心事に絞り込

んで検討する流れになつた。絞り込まれたのは、「対面授業が受けられない」「サークル活動ができない」「友人と交流の機会が持てない」「時間の過ごし方がわからぬい」だった。

各グループの学生達は手分けをして、今回の授業に参加していない他の学生にもアンケート調査（オンライン）を依頼するなど、幅広く意見や情報を収集する動きを行っていた。アンケート調査を通して、多くの学生が同様の不便や不自由を感じているのを再認識することにも繋がつた。個々の学生が漫然と抱いていたモヤモヤ感が共有される結果になり、それは一つの成果だった。

同時に並行して、コロナ禍のなかで本来ならばできていた当たり前の事柄が当たり前ではなくなつたという頭の切り替えをすること、制約のある範囲内で可能なことを工夫し実行するという柔軟な考え方、徐々に各グループの学生から感じられた。例えば、対面授業における良さはあるものの、オンライン授業の内容をもつと充実（先生と学生の双方にとって）させる工夫。オンラインを活用して自宅で好きなこと（音楽、映画鑑賞、ゲーム、筋トレ、料理など）を知人友人と一緒に楽しむ工夫等々。

授業最終日の各グループのプレゼンテーションでは、学生らしい柔軟さの工夫を聴くことができた。それが、た当たり前の事柄が当たり前ではなくなつたという頭の切り替えをすること、制約のある範囲内で可能なことを工夫し実行するという柔軟な考え方、徐々に各グループの学生から感じられた。例えば、対面授業における良さはあるものの、オンライン授業の内容をもつと充実（先生と学生の双方にとって）させる工夫。オンラインを活用して自宅で好きなこと（音楽、映画鑑賞、ゲーム、筋トレ、料理など）を知人友人と一緒に楽しむ工夫等々。

授業最終日の各グループのプレゼンテーションでは、学生らしい柔軟さの工夫を聴くことができた。それが、

学生時代のこと、会社員時代のこと、旅行のこと、家族のことなどを思いつくままに自然体で書き綴り、本を何冊か上梓してきたが、今回もその延長線での記録文章として残したいと思い執筆した。昨年の8月末に『コロナの日々』と題して出版した。

在京飯田高校同窓会の松原秀幸会長が同期生という縁もあり、彼の勧めで飯田高校同窓会ホームページに拙著の紹介を載せていただいた。コロナ禍は共通の経験でもあるので、ご関心ある方に一読頂ければ幸甚です。



6冊の拙著

## 会社員時代を振り返って

終わりに、私の会社員（商社マン）時代を簡単に振り返っておきたい。

「メキシコ」「米国」「韓国」と3つの国を並べ、何を意味すると思うだろうか。トランプ元大統領の過激発言を思い浮かべる方がいるかもしれない。そこにはギスギスとした不信感と緊張感がつきまとっている。

しかし、私にとってこれら3か国はむしろ懐かしく

現実的な正解であるかどうかは後日明らかになつてくるだろうが、今回の授業を通して前向きな手応えを感じられたのは嬉しかった。私自身も、学生から元気をもらつた気がした。

4月から新学期が始まる。コロナ禍が終息するまで、オンライン授業は継続する筈であり、また私の出番が来るかもしれない。若い世代とのおつきあいは私もして歓迎もある。



1月14日、オンライン授業にて1限目集合写真



韓國慶州市にある世界遺産の石窟庵にて

また親しみを感じる国だ。会社員時代に駐在した思い出深い国であるからだ。メキシコシティーに約4年半（1979～83年）、デトロイトに約4年半（1983～87年）、ソウルに約2年（1997～99年）と、合計約11年を海外で過ごした。メキシコと米国は家族と一緒にだつたが、韓国は単身赴任だつた。

商社勤務だったので海外駐在は至極当たり前であり、会社の知人友人にも海外駐在経験者は多い。同じ時期に駐在した方々とは定期的に旧交を温める会があり、その席では往時の想い出に浸ることが多い。

幸いなるかな、異なる文化や言語を有する国を3か国も経験する機会に恵まれたことは、私（家族も同じく）の人生に豊かな彩りを添えてくれている。

人の平均寿命が伸びて今や百歳を超えるのも珍しくない。心身ともに健康であることが長生きするための前提だ。まだまだこれからも元気溌剌と過ごしていきたいと思っている。

53